幸兵衛窯の歴史

幸兵衛窯は、1804 年に初代加藤幸兵衛（1755−1815）が江戸城に食器を納めて創業したのが始まりである。それ以来、幸兵衛窯では代々陶工たちが新しい様式や技法を導入し、美濃焼の発展に大きな影響を与えてきた。このレガシーをたたえて、「加藤幸兵衛」の名は歴代当主の多くに受け継がれている。

初代の後の 3 代（=2～4 代目）の幸兵衛窯では、主に染付（そめつけ）が作られた。五代加藤幸兵衛(1893-1982)は、青磁や金襴手など、中国の様式を取り入れた作品を制作した。彼のこのような、それまでの世代から脱却する試みは、幸兵衛窯のイノベーション文化の基礎を築いた。また、五代加藤幸兵衛は、岐阜県の陶磁器試験場の所長を 23 年間務め、新しい技術の開発や若手作家の育成に努め、「近代美濃焼の父」と呼ばれるようになった。

6 代目当主の加藤卓男（1917-2005）は、「三彩」という釉薬の技法を再現した。1995 年には人間国宝に認定されている。卓男は、ペルシャの陶磁器にも深い関心を寄せていた。研究を重ねた結果、ラスター彩やペルシャブルーなどの低温釉薬を再現した。彼の息子である 7 代目加藤幸兵衛（1945-）もラスター彩を中心に、父の釉薬の技術を現代風にアレンジしている。

現在の 8 代目加藤亮太郎（1974-）は、16 世紀後半の美濃焼である志野、織部、瀬戸黒を中心としたスタイルを確立している。